

東京都立日比谷高校

「ゼロからイチを創る」経験を 積みせながら リーダーとしての土台を築く

新学習指導要領や高大接続改革を受けて、資質・能力の育成が改めて重視されている中、世界や日本、地域のリーダーを輩出し続けている学校はどのような考えの下、教育活動を行っているのか。教科学力とともに、思考力や主体性などの汎用的な力の育成を、学校教育の中で意識して行っている、東京都立日比谷高校の取り組みを紹介する。

幅広い科目を履修させ、 学校行事にも力を注ぐ

2001年度に東京都から進学指導重点校の指定を受けて以来、長年にわたって学校改革に取り組んできた東京都立日比谷高校。東京大学合格者が数名にまで落ち込んでいた低迷期からの脱却を遂げ、近年は超難関国立大学の合格者数において目覚ましい実績を上げている。現在は、「グローバル社会の中で、多様な価値観を持った人々とチームを組んで困難な課題の解決策を見いだし、新たな知を創造していくグローバル・リーダーの育成」を目標に掲げ、教育活動を行っている。武内彰校長は次のように語る。

「高くて丈夫な木は、しっかりした土台があつてこそ育ちます。本校の役割は、生徒が将来、リーダーとして活躍するための土台づくりを行うことにあると考えています」

そのために同校が重視しているのが、「教科学習と学校行事の充実」の追究だ。まず、カリキュラムの特徴は、履修科目数の多さにある。文系・理系いずれの生徒も、地理歴史・公民は「日本史B」「地理B」「世界史B」「倫

理」「政治・経済」の5科目が、理科は「生物基礎」「地学基礎」「物理基礎」「化学基礎」の4科目が必修である。その意図を武内校長はこう説明する。「大学入試に関係する科目だけを選び、学ばせるようなことはしたくありません。本当に大切なのは、生徒を大学に合格させることではなく、その先で活躍できる力をつけさせることです」

この全科目履修型カリキュラムは、幅広い視野を持ち、異なる領域の知識・技能を結びつけながら、新しい価値を紡ぎ出せる力を育むことがねらいだ。

一方、学校行事では、5月の体育大会、6月の合唱祭、9月の星陵祭（文化祭）が3大行事であり、受験を間近に控えた3年生も全員参加する。それらの行事を通して、生徒は、リーダーとしての重要な資質である「他者と協力しながら物事を遂行していく力」や、「主体性を発揮しながら課題を解決していく力」などを身につけていく。

例えば、星陵祭ではクラス単位で演劇を行うのが伝統であり、脚本の選定からキャスティング、演出、セットの製作まで、すべて生徒が自分た



東京都立日比谷高校 校長
武内 彰 たけうち・あきら
 教職歴31年。同校に赴任して6年目。「生徒のためにどうすればよいか」が最優先である」



東京都立日比谷高校
白田浩一 うすだ・ひろかず
 教職歴34年。同校に赴任して15年目。2学年主任。「生徒の可能性を引き出し、その場をつくり運営する」



東京都立日比谷高校
中村隆道 なかむら・たかみち
 教職歴12年。同校に赴任して4年目。英語科主任。グローバル事業部。「限らない可能性を伝える」



東京都立日比谷高校
齋藤東彦 さいとつ・はるお
 教職歴34年。同校に赴任して12年目。進路指導部主任。「生徒が可能性を諦めず引き出せる環境をつくる」

東京都立日比谷高校

◎創立130年余りの伝統ある進学校。教育目標に「自立的人格」「学習と教養」「責任と協調」「心身の健康」「文化と平和」を掲げる。「自主・自律」の校風が受け継がれ、国際社会で活躍するリーダーを数多く輩出してきた。2001年度から東京都「進学指導重点校」、07年度から、文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」指定校、15年度から東京都「東京グローバル10」指定校。

◎設立 1878（明治11）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約320人

◎2017年度入試合格実績（現浪計）
 国立大は、北海道大、東北大、お茶の水女子大、東京大、東京医科歯科大、東京工業大、京都大などに158人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ716人が合格。

◎URL <http://www.hibiya-h.metro.tokyo.jp>

日比谷高校の3大行事

5月 体育大会

赤青白黄の4つの団に分かれて騎馬戦やリレーなどの熱戦が繰り広げられる体育大会。実行委員は柔剣道大会、球技大会を含めて早くから計画を立て、ビジョンを持って行事を運営していく。

6月 合唱祭

体育大会が終わると、合唱委員会の企画で全クラス参加の合唱祭の準備が進められる。課題曲はなく、クラスごとに選曲。音楽的に深く研究して豊かな歌声を響かせる。

9月 星陵祭

演劇と文化部の発表が中心となる星陵祭。演劇の準備は夏休み前の脚本選びに始まり、休み中は稽古や大道具作りには精を出す。観劇には整理券が必要なほど、毎年大盛況となる。

「自主・自律」と「ゼロからイチを創る力」

同校が重視する次代のリーダーを

ちで考え、準備する。とりわけ3年生は、2年次から3年次への進級時にクラス替えがないため、2年次の星陵祭が終わった時点から、受験勉強との両立を図りながら、翌年の星陵祭に向けた準備を進めていく。そのようにして創り上げられた舞台は、毎年、観る者の心を揺さぶる感動的なものになるといえる。

育てる教育は、単に全科目履修型カリキュラムなどの仕組みや、学校行事などの場を設定すれば実現するわけではない。2学年主任の白田浩一先生は、「最も大切なのは、本校に根づく哲学」と語る。

「本校には、教師が何かを教え込むのではなく、生徒が自分ですべきことや方法を考え、主体的に物事に取り組んでいく『自主・自律』や、何もないところから自分たちで物事を切り拓いていく『ゼロからイチを創る』ことを尊ぶ校風があります。この校風が、本校の様々な取り組みを

貫く哲学として定着していることが大きいと思います」

「自主・自律」や「ゼロからイチを創る」という言葉は、教師も生徒も合言葉のように共有している。そして、生徒が「自主・自律」を發揮し、「ゼロからイチを創る」機会が学校生活のあらゆる場面で設けられており、生徒は、それらに取り組む中で、リーダーに必要な主体性や、新しい価値を創造する力を鍛え上げていく。

例えば、同校は、文部科学省からはスーパーサイエンスハイスクール（SSH）、東京都からは先導的に国際理解教育を行う都立高校として「東京グローバル10」の指定を受けている。SSHも「東京グローバル10」も、国内外の多彩な分野の専門家を招いた講演会や、生徒が取り組んだ研究や活動に関するプレゼンテーションの機会が数多く設けられている。それらを企画・運営するのは、「SSH生徒委員会」と「東京グローバル10生徒委員会」の委員である生徒たちだ。委員が自分たちで当日の段取りを考え、準備をし、司会進行も務める。学校としては、少々の失敗は織り込み済みであり、失敗を糧に生徒が成長してほしいという思いがある。

SSHの主な活動

全校生徒が対象であり、文系・理系にかかわらず、自主的に希望すれば誰でも参加できる。

- **高大連携、産学連携に向けた活動**
SSH特別講演会や大学教授による出張授業、研究室訪問・研究体験、企業講演・工場見学、創造性を育む探究的な授業の指導法の開発
- **国際化に向けた活動**
海外の大学・企業との交流や連携、アメリカ西海岸・ハワイ島海外派遣研修、英語による各種講演会、生徒の英語によるプレゼンテーション
- **生徒による課題研究活動の推進**
各種研究発表会参加、科学オリンピック・コンテストなどへの積極的な参加

2年生から12人を選抜し、アメリカ海外研修を行う。卒業生のネットワークを活用し、シリコンバレーや国立天文台ハワイ観測所など、海外の最先端を見学する。

「東京グローバル10」の主な活動

- **ボストン・ニューヨーク海外派遣研修**
マサチューセッツ工科大学やハーバード大学などを訪れ、講義の受講や在学生との交流などを行う。
- **ALT及びJETの英語指導員の特別配置**
- **アスペン研究所・メキシコ大使館・ニュージーランド大使館・東京医科歯科大学など外郭団体との連携**
日本やアメリカなどの教授や研究者から直接指導を受け、プレゼンテーションなども行う。
- **ハーバードクラブなどの講演会**
- **ニュージーランドの Columba College、韓国の Michuhol Foreign Language High School との姉妹校提携**

2年生から12人を選抜して行われるアメリカ海外派遣研修では、国連本部やハーバード大学などを訪れるとともに、アスペン研究所でプレゼンテーション研修を行っている。

SSHでは、大学と連携しながら課題研究が行われるが、その際も、大学主導ではなく、生徒が自分で興味のあるテーマをゼロから見つけ出し、取り組むことを重視している。そして、「ゼロからイチを創る」姿勢を具現化しているのは、生徒だけではない。SSHではアメリカ西海岸・ハワイ島海外派遣研修が、「東京グローバル10」ではボストン・ニューヨーク海外派遣研修（それぞれ2年生から12人を選抜して派遣）が毎年行われているが、それらの研修先は、同校の教師が開拓している。英語科

主任で、グローバル事業部長を務める中村隆道先生は、次のように説明する。
「ボストン・ニューヨーク研修では、世界的なシンクタンクであるアスペン研究所を訪ね、食料問題に関する専門家の前で、生徒がこの問題についてプレゼンテーションを行い、アドバイスをもらう場を設定しています。これが実現したのは、私ともう1人の担当教師が、飛び込みに近い形で研究所を訪問し、こちらの思いを粘り強く伝えることで、相手を動かすことができたからです。教師も

ゼロからイチを創り出していくわくわく感を味わっています」

そうした教師の姿は、生徒にも大いに刺激を与えている。教師が研修先の開拓に苦労している時には、「先生、こうしてみたらどうですか？」と一緒にゼロからイチを創ろうとする生徒も出てくるのだという。

自分で解決したものを1つでも多く増やしていく

進路指導部主任の齋藤東彦先生は、「自主・自律」や「ゼロからイチを創

る」ことを大事にしながら、生徒が物事に取り組んでいく中で、思考力や表現力が鍛えられていくという。教師がいつも生徒に語りかけているのは、「難しい課題に直面した時には、1週間でも2週間でもとことん考えなさい。そして、自分の力で解決できたものを1つでも多く増やさない」ということだ。ある分野で考えを突き詰める経験をするとは、ほかの分野に臨む際にもプラスに作用する。

「例えば、私の担当教科は数学ですが、当然、数学が苦手な生徒もいます。本校の生徒には、その苦手な部分を他分野で身につけた『粘り強く考える力』を駆使することで補おうとする姿がよく見られます。だからこそ、生徒には、幅広い科目や様々な学校行事に取り組ませ、どんな場面においても粘り強く考え抜く経験をさせることが大事だと思っております」（齋藤先生）

多様な経験を積むことは、生徒自身も気づいていなかった自分の可能性を発見する機会にもなる。同校の多くの活動は、生徒同士の協働によって行われる。すると、チームの中である役割を引き受けたり、ほかの生

徒から「○○さんはこういうのが得意だね」と指摘を受けたりする中で、その生徒の隠れた長所が引き出されていくことがある。

そして、もう1つ鍛えられていくのが、表現力である。同校ではSSHや「東京グローバル10」を中心に、生徒が自身の活動や研究を、日本語や英語で発表する機会が多く設定されている。自分がゼロから見つけて取り組んだテーマであるだけに、生徒は少しでも自分の思いを聞き手に伝えようと、入念に準備をして本番に臨む。自然と発表は熱を帯び、深いものになっていく。そうした経験を積む中で、表現力も高まっていくのだ。

指導のあり方について 教師間での共有化を図る

同校が、今後もリーダー育成を目標とする質の高い教育を維持するためには、教師の指導力の向上や、学校全体での意識の共有が必須となる。

「中でも大切なのは、授業の質を上げることです。授業の中で、生徒に考えさせる場面や、仲間の意見を聞きながら自分の意見を発信させる場

面を、いかに多く取り入れられるかによって、生徒の思考力や表現力は大きく違ってきます」（武内校長）

そのため、武内校長は、70数人の全教師の授業観察を年2回行っている。その上で、教師一人ひとりと面談し、授業について助言している。また、指導力の高い教師を3人指名し、その授業をほかの教師に見学してもらい、そこで得た気づきや、同校としての授業のあり方を話し合う場も設けている。

それらの取り組みの結果、生徒に行った授業アンケートにおいて、5年前は60%台だった授業への肯定度が、16年度には80%を超えたという。

教師間の指導体制の一体化という点では、進路指導部も重要な役割を担っている。進路指導のみならず、各学年団や教科団と連携しながら、教科指導のあり方にまで進路指導部がかかわっている。

「進路指導部が学校全体を引っ張る核となることで、生徒の進路実現という目標に向けて、学年も教科も統一感を持って指導にあたることでできます。本校はそれができていると自負しています」（齋藤先生）

同校では、進路指導部と3学年団、

前年度卒業学年団が中心となり、全教師が参加する進路指導検討会を春と秋に実施しており、いずれも4月と6月、10月と11月の2回ずつ行う。

1回目は、卒業学年が行った取り組みが模試の成績推移や進路実績にどのように結びついたかを分析し、各学年の課題を出し合う。各学年団の教科担当は、その課題を持ち帰って教科指導の改善策を立て、進路指導部に提出。進路指導部は、その内容で校長に確認を取った上で（その際、見直しを求められることもある）、冊子にまとめる。そして、2回目の検討会で、それぞれの改善策について全教師で議論する。こうした進路指導検討会の議論を経て、教科シラバスを作成している。

「進路指導検討会で出てきた考え方の1つに、『下限』というものがあります。例えば、ベネッセの『進研模試』で言えば、偏差値70だと東京大学の卒業生の成績の推移を分析した際に、ある時期までは偏差値が70だったとしても、3年生後半の伸びによって合格した生徒が数多くいることが分かりました。そこで、偏差値70を下限として、これを維持することを

目安とした教科指導をしよう」と、教師間の意識の共有化ができています」（齋藤先生）

また、同校では16年度、ベネッセの「GPS Academic（*）」（以下、GPS）を1年生で実施した。17年度も1・2年生での実施を予定している。同校では、模試の結果分析はもちろんのこと、GPSによって、いわゆる「見えない学力」と言われてきた資質・能力も含めて生徒の学力を正確に把握し、教師間でそれを共有化することで、教育の質の向上を図ろうとしている。

「これらの思考力は、2020年度に始まる『大学入学共通テスト』で求められる力であり、これからの社会に求められる力でもあります。昨年度のGPSでは、本校の1年生は相対的に批判的思考力が弱いという結果が出ました。こうした結果を教師間で共有し、授業における探究活動、あるいは行事や部活動を通して、生徒の批判的、協働的、創造的思考力をどのように高めていくかを考えていくことで、さらなる教育の質の向上を図っていききたいと思います」（武内校長）

* ベネッセ教材の1つで、問題発見・解決に必要な3つの思考力（批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力）を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。